

私たちにできること② —廃墟と瓦礫から新しい社会の復興へ—

学長 阿久戸光晴

序. 廃墟と瓦礫を前にして（映像から）

- （1）突如襲った巨大地震（下から）・大津波（横から）・原発爆発（上から）→三方向からの直撃
- （2）自然の猛威→自然は必ずしも私たちに抱擁してくれない→私たちが無策なら…→学ぶ意義
- （3）しかしかつて自然の猛威をしのいだノア（旧約聖書から）の方舟^{ほこぶね}→今諸君がおられる天蓋^{てんがい}

1. 私たちにできること（聖学院大学の場合）

- （1）被災地の3大学と1育児院へ緊急に送った「水と火」と message→‘You are not alone’ 3.23
- （2）復興支援センターを立ち上げて（学生や教職員が登録）支援開始→ある村へ集中支援
- （3）支援することと学ぶこととにある深い関係

2. 支援を考える学び

- （1）復興に参画することで建てられる人格
- （2）老若男女日本国民の中に芽生え始めている大きなものを捉える→人間福祉学部の諸学科の役割
- （3）世界各国の「温かい手」→人文学部2学科の役割。本学約2,800人中274人15カ国の留学生
- （4）支援策の政策論的研究。官民の支援の法的基礎構造を考える→政治経済学部2学科の役割
- （5）「人生における危機的状況に対して挑戦することこそ潜在力の開発となる」（アルフォンス・デーケン）

3. 私たちにできること

- （1）被災地に一番不足している「心の宿る言葉」を発信しよう
- （2）これまでの日本の歩みを考え直しつつ、一市民として生きること
- （3）とくにこの社会で切り捨てられてきた人々へのまなごしを持ち、できる行動を起こすこと
- （4）現代における市民生活のあり方を根底から考え直すこと

結. 現代の国のあり方を問いかけている大震災「3・11」

（1）ミヒャエル・エンデの問い（「エンデのメモ箱上」134頁～）から大震災が問うていること
白人とインディオのチームが一緒になって遺跡発掘調査に出かけた。それは細かな日程表に拠って行われていた。スケジュールが順調に守られていた4日目。インディオは突然円になって座り込み、先に進むことを拒んだ。白人がどんなに説得してもインディオは前に進もうとしない。仕方なくあきらめた2日目、インディオたちは何も言わず再び歩き始めた。その後白人に語ったことには、「われわれは早く歩きすぎた。だから魂が追いつくまで待たなければならなかったのだ」と。

- （2）魂のこもった社会への再建へ。あらゆる分野で
- （3）「分かち合い社会」、「助け合い社会」へ
- （4）あの映像を忘れずに

※オープニング映像 <http://www.youtube.com/watch?v=jyNQ0v1C10o>

※エンディング映像 http://www.youtube.com/watch?v=0M3C_DkLr2Y